

日本語文解析におけるテニス・アスペクトの問題

草 雜 裕
(筑波大学 文芸・言語学系)

1. はじめに

日本語の文の解析を困難なものにして
いる現象の一つにテニス・アスペクト
の表現がある。その原因は、テニス・
アスペクトの形態から意味へ写像が成
り立たないことにある。ところが、日
本語の母語話者は実際の文を聞いた
り、読んだりする時、テニス・アスペクト
に関して、それほどあいまいさを感じ
ない。テニス・アスペクトの意味の決
定には、単に形態のみならず、文中に
ある他の要素の情報がかなり関与して
いるわけである。

本稿は日本文のテニス・アスペクト
解析における問題点を指摘し、実際に
用いられた日本語文のテニス・アスペ
クト解析のアルゴリズムを考察するも
のである。

2. テニス・アスペクトの定義

テニス・アスペクトを次のように定
義する。凡そ焦点は時の流れのどの時
点に話者の注意が向けられているかと
いうことである。

1) テニス

A. 絶対テニス

焦点が発話時点の前(過去)

同(現在)、後(未来)

B. 相対テニス

第二の現象が第一の現象に
あたる焦点の前、同、後

2) アスペクト

A. 静態相

言語外現象が状態として認
知された現象で内的な変化の認
知のないもの

B. 動態完了相

言語外現象が動態(出来事
として認知されたもの)で、焦
点のあたっている時の期間の方
が現象の時間より長いもの

C. 動態未完了相

言語外現象が動態で、焦点
のあたっている時の期間よりは
時点より現象の時間の方が長い
もの

この外に問題にしている現象を目的
の現象としてとらえるか、抽象的な
現象としてとらえるかを表現で区別す
る言語がある。たとえば英語の

John is reading a newspaper now.

John reads a newspaper every morning.
の如きで、後者を習慣などと呼ぶ。日
本語では表現に区別がない。

また動態が発生した後に何らかの結果
が状態として残ることを表現するの
は静態相だが、この状態の認定も言語
で果たり。たとえば英語では、

John has come here.

John has once been to N.Y.

といった表現があり、前者はJohnが
来た(動態)の結果が今ここにいろ
う形で残り、それを静態としてとら
えるのに対し、後者はN.Y.へ行った
(動態)という経験を静態としてとら
えるので同じ表現が生ずる。日本語で

は通常、後者を表わすのに「こ
とがある」という表現を用いる
が、前者に対応する。

山田は今京都に行っている。
と同じ。

図1 テニスとアスペクトの表現

テニス アスペクト	絶対テニス			相対テニス		
	過 去	現 在	未 来	前	同	後
完了相	タ	・	ル	タ	・	ル
未完了相	テイタ	テイル	テイル	・	テイル	・
静態相	テイタ	テイル	テイル	・	テイル	・
	タ	ル	ル		ル	

山田は一度京都に行っている。
を用いる可能性がある。

3. テニス、アスペクト解析の問題点

日本語におけるテニスの形態は「タ形」と「ル形」の対立、アスペクトの形態は「テイル形」とその形の無い「非テイル形」との対立といえる。ここでいう「タ形」は動詞、形容詞（いわゆる形容動詞も含む）、繫辞などの語尾における「タ」、「ダ」などの形、「ル形」は動詞語尾の「ク」、「ス」、「ツ」、「ヌ」、「ム」、「ル」、「グ」、「ブ」、形容詞語尾の「イ」、「ダ」、繫辞語尾の「ダ」などの総称である。また「テイル形」とは形態素 -tei- を含む表現の総称である。

これらの形態とテニス、アスペクトの意味の対応を前頁図1に示す。

まず図1に表わした表現のあいまいさを指摘しよう。図1では意味として絶対テニスと相対テニスにそれぞれ三つの意味、アスペクトに三つの意味があり、計18のスポットがある。このうち絶対テニスの現在と相対テニスの同は完了相を持つ。また相対テニスの前と後は未完了相および静態相を持つ。したがって意味のスポットは13になる。それに対し、形態はテニスの「タ形」と「ル形」、アスペクトの「テイル形」と「非テイル形」の組み合わせで4しか無い。四つの形態で13の意味を表わすわけにここにあいまいさの可能性が生じる。その上、複数の形態が同じ意味を表わす（静態相）ことが、さらにあいまいさを複雑にしているように見える。

これを具体的に述べてと、

1. 「非テイル形」の「ル形」
完了相 未来 と 同、静態相の 現在、未来 と 同
2. 「非テイル形」の「タ形」
完了相 過去 と 前、静態相の

過去。

3. 「テイル形」の「ル形」
未完了相および静態相の 現在、未来、同

4. 「テイル形」の「タ形」

未完了相と静態相の 過去

となる。さらに図1には表わされているが、前述の目の前の記述と習慣の相違が形態にはあらわれない。これは日本語自体の解析としては大きな問題ではないが、この二つの意味を異なる形態で表現する言語との機械翻訳のための解析には当然大きな問題となろう。

4. アスペクトの解析

まず、アスペクトの解析に関して考察しよう。アスペクトの形態が生じるあいまいさは、

1. 「非テイル形」における完了相と静態相の同形。
2. 「テイル形」における未完了相と静態相の同形。

である。

アスペクトにおける、このようなあいまいさは動詞の使い方を分析し、分類することにより、かなり解消される。

以下、アスペクトに関する動詞の分類を行う。

状態動詞

状態を常に表わす状態動詞（たとえば、いる、ある、できる）は「テイル形」を持つ。そして「非テイル形」が他の動詞の「テイル形」で表わす静態と同じ意味を持つわけだ。この種の動詞の検査には、「テイル」がフクかどうかを見ればよい。

また、形容詞や繫辞を持った名詞なども状態を表現するわけで、これらのアスペクトを問題にするなら、この状態動詞のクラスに入れておけばよい。

経過動詞

まず例を見よう。

遠くの山をながめている。

において「ながめている」という現象で問題になるのは「ながめている」という現象があるかないかであり、「ながめている」という現象が終了すれば、結果はその現象が過去にあった、したがって「ながめていた」あるいは「ながめた」であり、結果としての静態は残らない。

したがって経過動詞の「テイル形」は動態未完了相ということになる。

経過動詞の判定には、動詞の「テイル形」と「タ形」の前後関係を調べればよい。たとえば、「ながめる」に関して、

① ながめた。

② ながめている。

を見て、①が成り立った後で②が成り立つような状況があるかどうか、すなわち、①と②が同時に言えるかどうかを判定する。そのような状況が考えられなければ、その動詞は経過動詞である。

変化動詞

経過動詞とは逆に未完了相を原則として持たないのが変化動詞である。たとえば、

明りがついた。

において、動詞「つく」が表現しているものは「ついている」状態から「ついている」状態へのスイッチを示すものであり、その現象が動作であるか自然現象であるかといったことは問題にならない。

この変化動詞は「テイル形」が目の前の変化の過程を表すことが決まてありえないかどうかの判定を行うことで分離できる。すなわち、

明りがついている。

は「ついている」状態から「ついている」状態への変化が起っていることではなく、その変化が起った結果としての状態を指すのである。

ただ、この変化動詞もごくまれではあるが、変化の過程が実際に考えられる場合がある。たとえば、主体が複数であるような時、変化はじめてから、しおれるまでに時間を要する。この間の現象を表現するのに「トコロダ」を用い、たとえば、

今、明りがついていると二つだ。

というように表現する。ただし、変化動詞の場合、「トコロ」だけでは過程

を表す機能はなく、

明りがついていると二つを見ていた。

は過程ではなく変化の結果の状態になる。これは後述の瞬間動詞の。

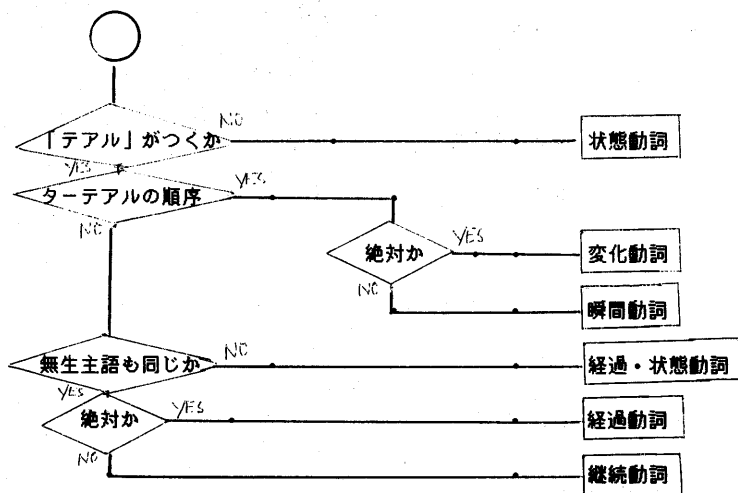
明りをつけていると二つを見ていた。

が動態未完了相を表すのと異なる。

経過・状態動詞

「テイル形」が動態未完了相と静態相両方に用いられる動

図2 動詞の分類



詞の中で比較的判断が簡単なのが、この過程・状態動詞である。まず例を見よう。

関門海峡トンネルは、この早朝の瀬の下をくぐっている。

バリケードが道をさえぎっている。は明らかに状態を表わしている。それに対し、

子供達が木の下をくぐっている。

プロシヤ兵の一群がこれをさえぎっている。

は動態の過程を表わしている。この両者の違いを示唆する情報は主語が前者

は無生名詞、後者が有生名詞に属しているということである。

なお、別の見方をすれば、この種の動詞はそれぞれ別の動詞の種類に属し、無生名詞を主語にする動詞は変化動詞であり、有生名詞を主語にするのは経過または継続動詞であると考えることもよいだろうが、そうすると同形異義が生ずることになる。

瞬間動詞

金田一(1950)により瞬間動詞と名付けられたもののうち前記の変化動詞を除いたものをここで瞬間動詞と呼ぶ。

通常は変化動詞同様、ある状態から別の状態へのスイッチの役目を果たす。ただ、その変化が通常瞬間的にとらえられるだけで、状況によってはその「瞬間」が延び、過程として認知されることがある。たとえば、

疫病で人がどんどん死んでいる。

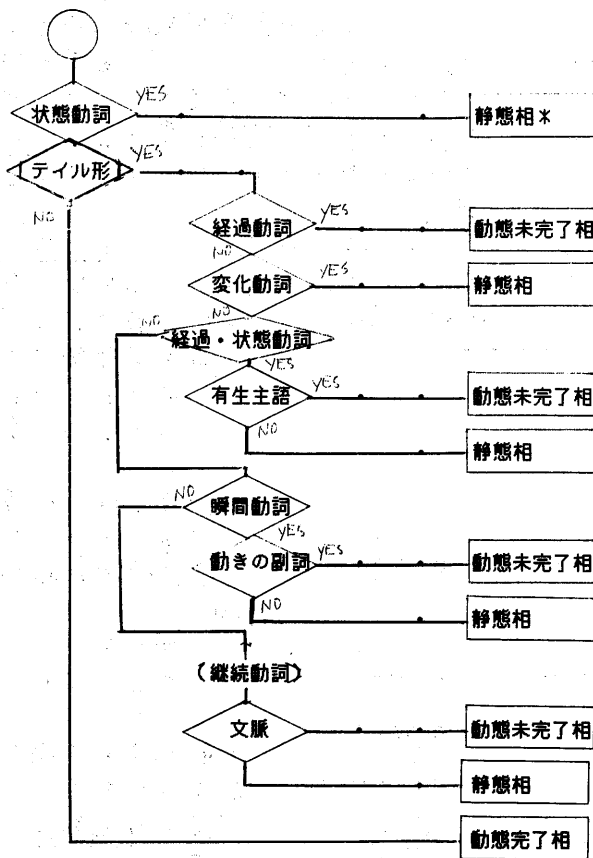
は、明らかに「死ぬ」と自体、生きている状態から死んだ状態へのスイッチだが、複数の人間の死を「どんどん」というような動態を形容する語で修飾し、そこに動態の過程の認知が発生している。

この様な瞬間動詞の「テイル形」が動態未完了相を表わす場合、必ずという保証はないが、「絶えず」、「次々」、「突然」、「どんどん」、「日増しに」といった動態の変化を表わす副詞を伴うことが多い。

継続動詞

同じく金田一(1950)で継続動詞と名付けられた動詞から、経過動詞と経過・状態動詞を除いたものである。

図3 アスペクトの解析



*但しテンス解析では「テイル形」がついたものとして扱う

この継続動詞はアスペクトの判定がいちばんやっかいである。継続動詞の「テアル形」は通常、動態未完了相を表すが、同じ「テアル形」がその動態の結果、なんらかの状態を残す場合、それを静態として表現する。たとえば、山本は...、同僚と職場を抜け出し、石橋町内のスナック三軒で、ワイスキー水割り大杯とビール三本を飲んでいった。

は、「飲む」という二とが起っている二とを表現する動態未完了相ともとれるが、実際には、この二とが起った後、交通事故を起こし、その時点での状態の記述をしている新聞記事の一部なのである。

継続動詞が静態を表わす文はそれほど多くはないようだが、この判定には文脈解析が必要になってくる。

以上の動詞の分類と判定法は図2に、アスペクト解析のアルゴリズムは図3に示してある。

アスペクトの最後はいわゆる習慣の表現にふれておく。習慣は未完了相でも完了相でも静態相でも表現される。たとえば、

毎日本を読む。

毎日本を読んでいる。

あの家は毎日客が来ている。

の表現や習慣を表わしている情報は「毎日」という表現だけである。その他、「毎朝」、「毎週」、「いつも」などの表現が文中にあれば習慣と判定できるが、完了相が未来において動態か(連続して)出てくること、未完了相や静態相が、その現象が繰り返り、起っている二とを表わす以上、アスペクトの表現だけでは習慣か記述かの判定はできない。ただし、通常の記述が習慣的な現象かは、その文が用いられる文章の種類でかなり判定できるようなのである。

5. テニスの解析

テニスの解析は草薙(1981b)に詳しく述べてあるので、ここではそのアルゴリズム(図4)を簡単に説明する。

テニスの問題はそれが絶対テニスか相対テニスかで意味が異なるのに対し、日本語ではこの二種類のテニスに同じ形を用いることにある。

ところが、わざわざ場合を除き、テニスの表現がどんな種類の節中に用いられるかで絶対テニスと相対テニスの区別がつく。

まず、相対テニスは前述のように問題にしている現象が基準となる現象にあたっている点とどんな前後関係になっているかによってきまる。それに対し、焦点が現象より小さい場合に未完了相や静態相が用いられるのであるから、未完了相や静態相が相対テニスとして用いられるのは同の時のみである。したがって「テイク」の表現は絶対テニスだけであり、相対テニスとは現われない。なお状態動詞は「テイク形」を持たず、たいてい静態を表わすので状態動詞は図4には「テアル」がついているとして判定する。

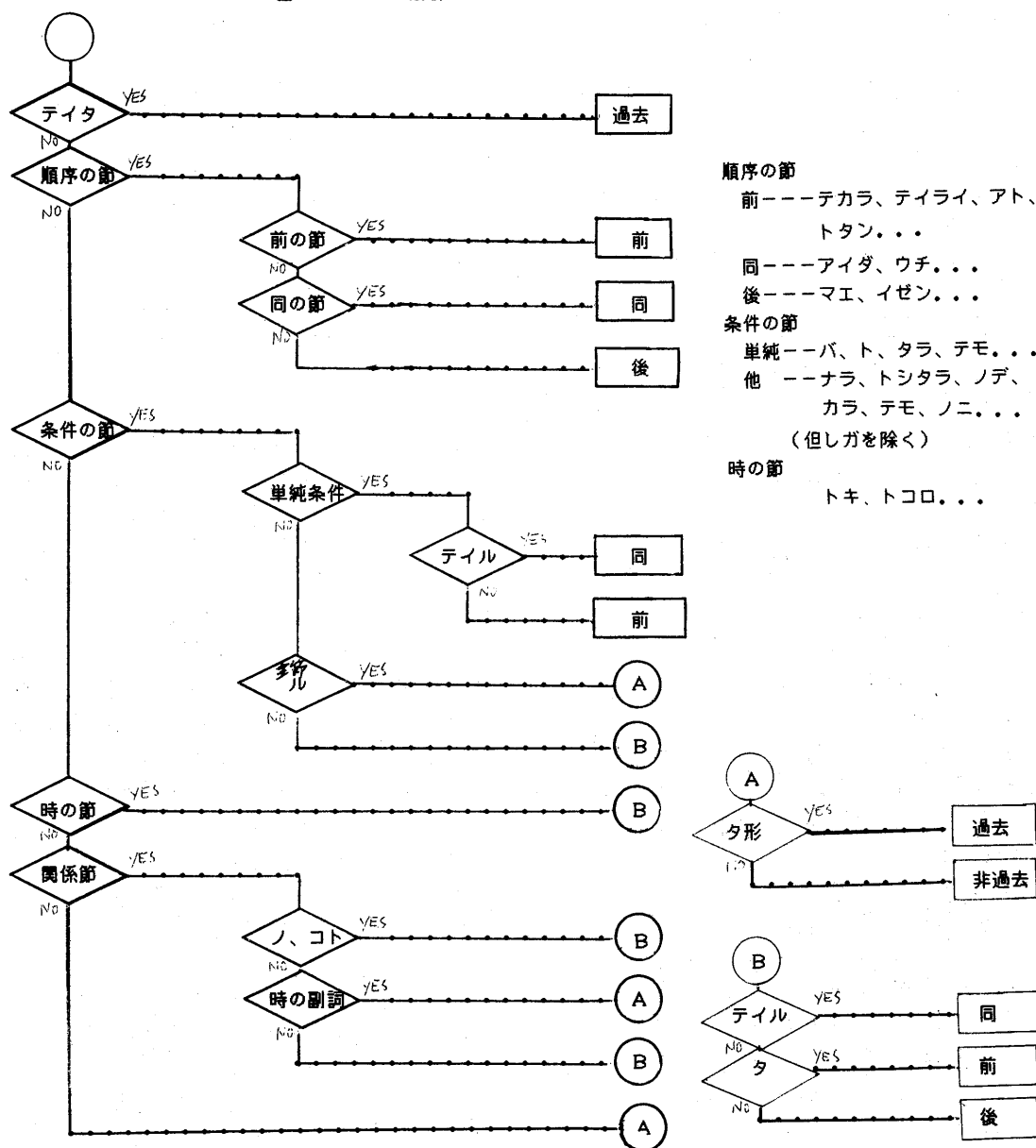
次に、その自体現象の順序関係をあらわす節はテニスが固定している。

条件を表わす節のうち、テニスの対応がないもの(単純条件)は「テイル」が同、その他は条件として前に来る。テニスの対応があるものは主節が「ル」なら絶対テニス、「タ」なら相対テニスを表わす。時間的順序を表わす「時の節」も相対テニスを表わす。

関係節のうち「ノ」、「コト」を接けるものは相対テニス、その他で「きのう」、「去年」、「明日」などの時点を指定する副詞が共存するものは絶対テニス、それ以外は相対テニスである。

これ以外の節では絶対テニスで現われる。

図4 テンスの解析



- 文献 Comrie, B (1976). *Aspect*. Cambridge Univ. Press.
 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」、『言語研究』15.
 — (編) (1976) 『日本語動詞のアスペクト』 石井書房.
 草薙裕 (1981a) 「従属節および関係節におけるテンス・アスペクトについて」、『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』 大修館.
 — (1981b) 「日本語のテンス、アスペクトの解析のアルゴリズム」、『文藝言語研究』(言語篇) 6.